

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予報第5号（8月）について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

予報第5号

**イチジク黒葉枯病の発生確認と、
耕種的な防除を徹底しましょう！**

本年は6月中～下旬の降水量が多かったため、7月上旬頃からイチジクの露地栽培で、葉柄や葉脈に黒葉枯病の発生が見られ、7月中旬頃に急激に増加しました。

今後の降水量は平年並と予想されており、果実への感染が心配されます。

現在、発生が多い園では、感染源となる罹病した枝・葉は園外に持ち出すとともに、園内の通風・採光に努めて下さい。



葉柄での発生状況



葉脈での発生状況

<予想される向こう1か月の天候（平成23年7月29日～8月26日）>

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は平年並か低く、2週目は平年並、3週目以降は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

（福岡管区気象台 平成23年7月29日発表抜粋）

8月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病 (葉いもち・穂いもち) 紋枯病 セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	やや多	やや多	やや多
		少	少	少
		少	少	少
		少	少	少
		少	少	少
		並	並	並
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	やや多	やや多
かんきつ	黒点病 ミカンハダニ	やや少	やや少	やや少
		並	並	並
なし	ナシヒメシンクイ	やや少	やや少	やや少
ぶどう	べと病	やや多	やや多	並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ	やや多	やや多	やや多
		並	並	並
		やや少	やや少	並
いちじく	黒葉枯病	—	—	—
果樹共通	カメムシ類	少 (前年比)	少 (平成20年比)	並
茶	炭疽病 輪斑病 チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少	並
		やや多	やや多	並
		多	多	多
		少	やや少	並
		並	並	並
		やや少	やや少	少
		少	やや少	並
イチゴ (育苗期)	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	やや少	並	並
		多	多	並
		並	並	並

注①：いちじく黒葉枯病は本年から調査実施のため、発生量は未記載である。

注②：果樹共通・カメムシ類の発生量の平年比は、現況については前年比、8月の発生予報については、発生状況が類似している平成20年比としている。

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【普通作物：水稲】

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

なお、発生状況は地域・ほ場による差が大きく、発生株率が100%の多発ほ場も、一部認められる（平成23年度技術情報第3号参照）。

発病株率 11.3%（平年 5.8%、前年 3.6%）

発生ほ場率 24.5%（平年 19.1%、前年 20.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年とされている（±）。

(3) 防除上の注意

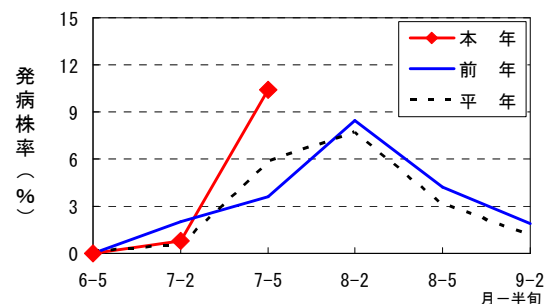
ア 葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に努める。

イ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。

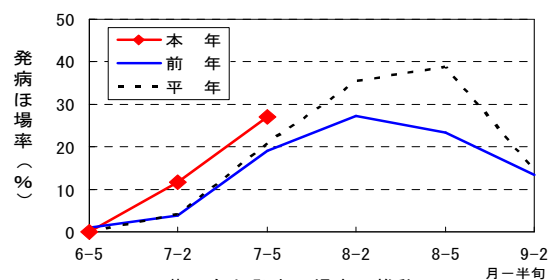
粉剤は出穂期前、粒剤は出穂期2週間前に処理する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

エ 薬剤は「平成23年度普通作物病害虫・雑草防除の手引き」を参照し農薬使用基準を遵守する（以下の病害虫についても同様）。



葉いもちの発生推移



葉いもち発生ほ場率の推移

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 0%（平年 1.2%、前年 0.4%）

発生ほ場率 0%（平年 9.7%、前年 4.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

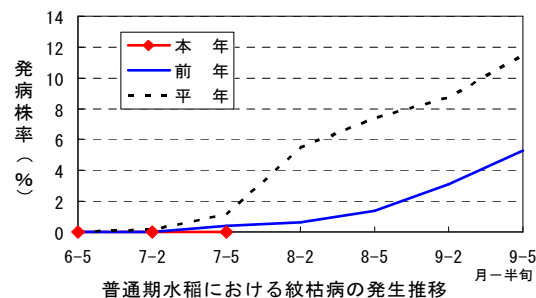
(3) 防除上の注意

ア 出穂期以降に上位葉へ病斑が進展するのを防ぐため、発生ほ場では防除を実施する。

粉剤は出穂期10～14日前の防除効果が高い。

イ 粒剤は薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。

ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。



普通期水稲における紋枯病の発生推移

3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

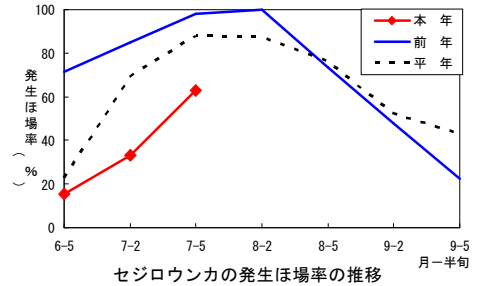
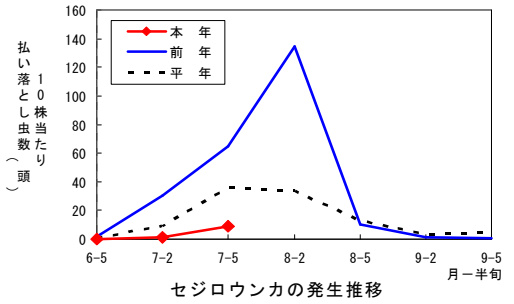
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

10株当たり払い落とし成幼虫数 8.9頭
(平年 35.9頭、前年 64.9頭)
発生ほ場率 63.0%(平年 88.1%、前年 97.9%)

(3) 防除上の注意

- ア 飛来量、発生量ともに平年より少ないが、今後の発生状況には注意する。
- イ 昨年、本種によって媒介されるイネ南方黒すじ萎縮病(仮称)の発生が確認された(平成22年度特殊報第3号参照)。特に、本種が増殖しやすい飼料用水稻では、「稲発酵飼料生産・給与マニュアル」(稲発酵粗飼料推進協議会等編)、「多収米栽培マニュアル」(農林水産省)等に沿って防除を行う。



4 トビロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

発生ほ場率 2.1%(平年 15.2%、前年 22.9%)
10株当たり成幼虫数 0.02頭(平年 0.27頭、前年 0.27頭)

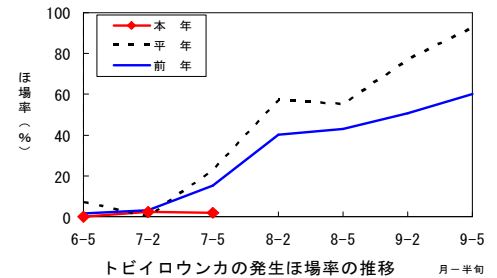
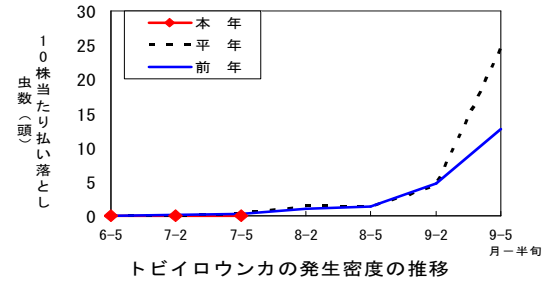
- イ 県下5地点の予察灯による6月~7月4半旬までの合計誘殺虫数は、2頭(平年 17頭、前年 51頭)と平年より少なかった(一)。
- ウ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 発生初期には低密度でも急激に増加するため、発生パターン図(平成23年度技術情報第3号参照)を参考に必ずほ場での発生状況を把握し、適期(若齢幼虫発生期)に防除を行う。

※要防除水準 飛来後第一世代 100株当たり 20頭以上
飛来後第二世代 100株当たり 100頭以上
9月末 100株当たり 1,000頭以上

- イ 箱施薬剤が施用されたほ場でも、残効がなくなっている場合があるため、発生状況を十分に把握する。
- ウ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。
- エ 無人ヘリ防除は早朝に実施する。気温が上昇した時間帯に無人ヘリで薬剤散布すると、薬剤によっては防除効果が著しく低下することがある。



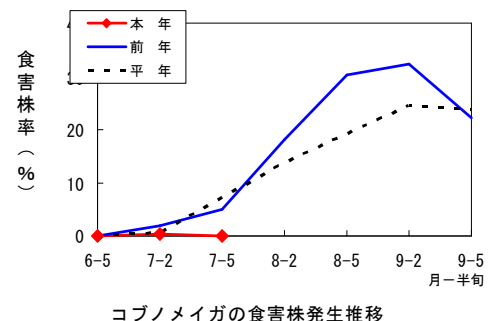
5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。



食害株率 0% (平年 7.2%、前年 5.0%)

発生ほ場率 0% (平年 52.3%、前年 43.8%)

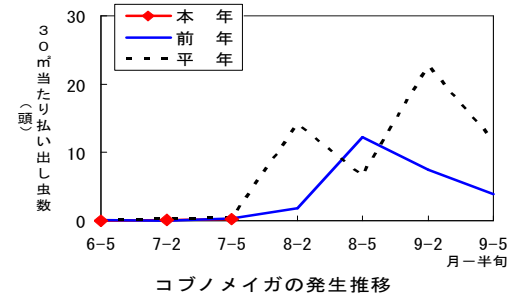
30 m²当払出し成虫数 0.2 頭 (平年 0.4 頭、前年 0.4 頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期から1週間後である。

イ 本種はセジロウンカと同時期に飛来していると考えられるので、発生パターン図(平成23年度技術情報第3号参照)を参考に防除を行う。



6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量: 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 県下5地点の予察灯における7月1半月~4半月までの誘殺虫数は、アカスジカスミカメムシはやや多かったが主要3種とミナミアオカメムシは少なく、平年並であった(±)。

アカスジカスミカメ 955 頭

(過去6か年平均 671 頭、前年 640 頭)

ミナミアオカメムシ 1 頭

(過去6か年平均 33 頭、前年 7 頭)

主要3種カメムシ(モリカメムシ、ホリカメムシ、シロカメムシ) 3 頭

(過去6か年平均 19 頭、前年 56 頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

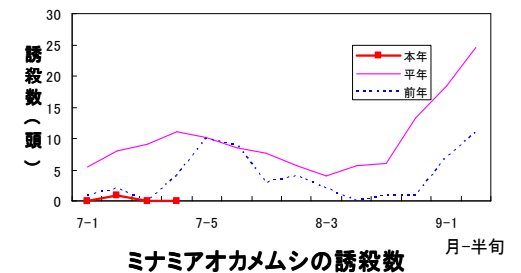
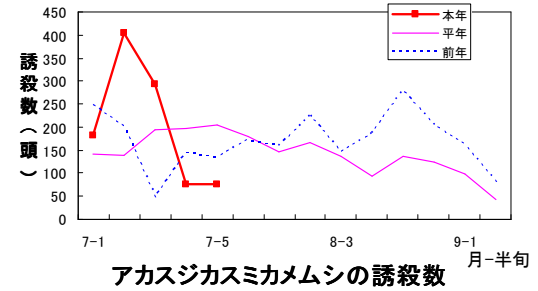
(3) 防除上の注意

ア 畦畔や休耕田などの草刈を徹底し、出穂期2週間前までに終了する。

イ 防除適期は、穂揃期及びその7~10日後である。

ウ 出穂期の早いほ場では集中的に加害される恐れがあるため、発生状況に注意する。

エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフエン剤の防除効果が低いので、効果の高いクロチアニジン剤またはジノテフラン剤等を使用する。



【普通作物:大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量: 平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月1半月~5半月のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、やや多かった(+)

筑紫野市 730 頭 (平年 555 頭、前年 269 頭)

柳川市 2,902 頭 (前々年 1,659 頭、前年 845 頭)

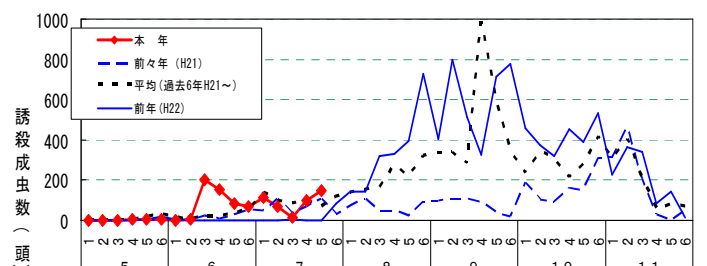
行橋市 114 頭 (前々年 979 頭、前年 211 頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

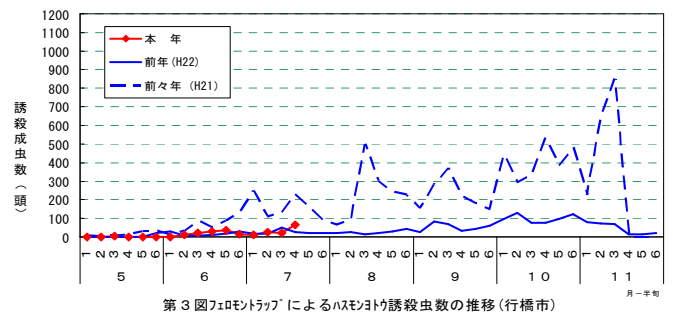
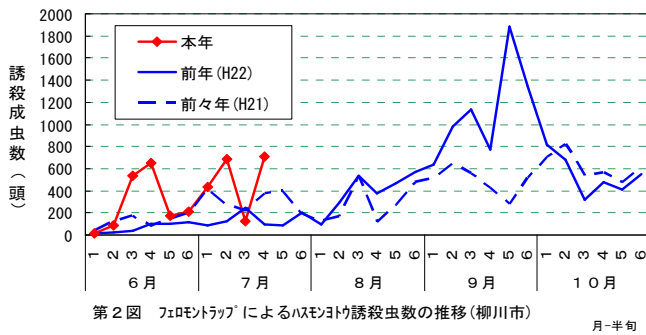
(3) 防除上の注意

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。

イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。



ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから 10 日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるのでほ場における若齢幼虫の食害で生じる白変葉の発生状況を必ず確認する。



【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－)。

発病果率 0.5% (平年 1.9%、前年 1.4%)

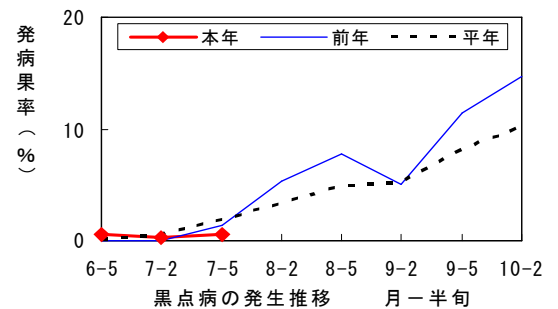
発生ほ場率 27.3% (平年 36.2%、前年 45.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる枯れ枝は除去し、園外に持ち出して処分する。

イ 前回の散布から1か月後、又は積算降水量250mmを目安に防除を実施する。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 16.8% (平年 14.7%、前年 31.3%)

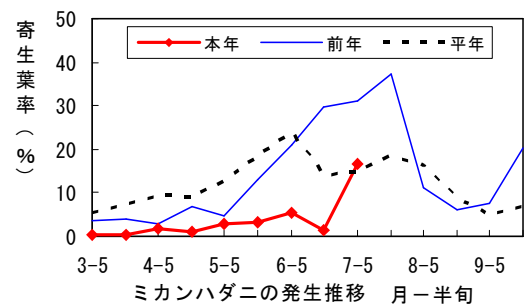
発生ほ場率 81.8% (平年 62.3%、前年 83.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 ナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

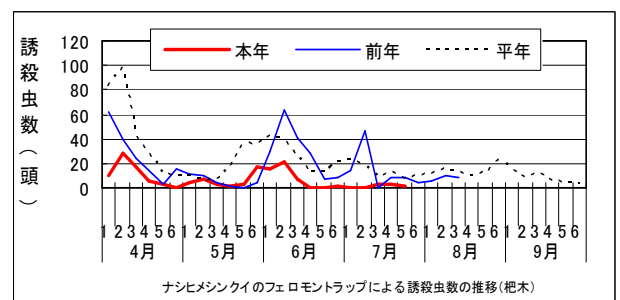
発生量：平年・前年よりやや少

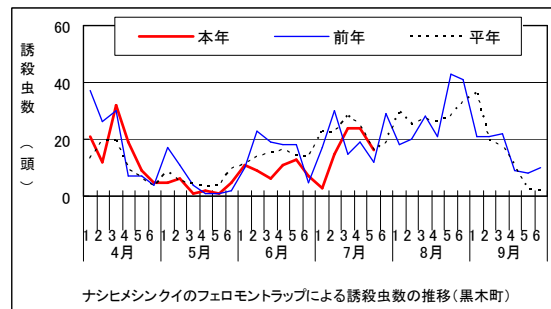
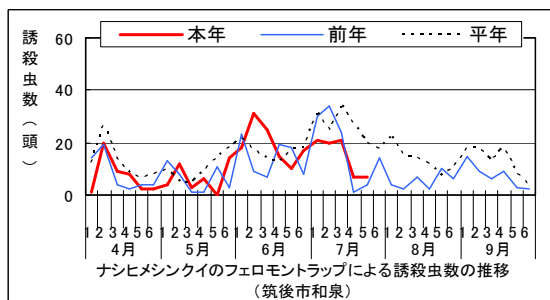
(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～5半旬までのフェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや少なかった(－)。

県内3か所の平均 55頭

(平年 107頭、前年 88頭)





イ 7月5半旬調査の結果、発生量は少なかった（－）。

被害果率 0%（平年 0.4%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 22.9%、前年 0%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 8月上～中旬頃の発蛾最盛期直後に防除を行う。

防除後も成虫が多く見られる場合は、7～10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 収穫期を迎える品種は、薬剤の選定など農薬使用基準を遵守する。

【果樹：ぶどう】

1 ペト病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

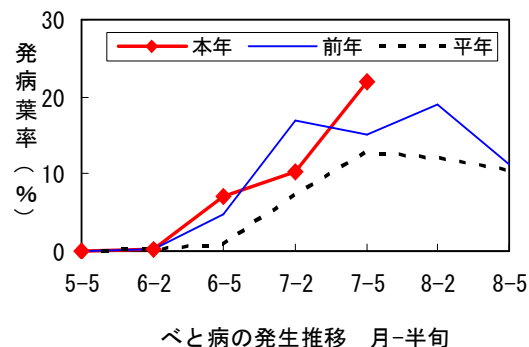
発病葉率 18.8%（平年 12.9%、前年 15.1%）

発生ほ場率 71.4%（平年 70.9%、前年 88.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア ボルドー液は、降雨直後や散布直後の降雨により、薬害が発生する可能性があるため注意する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

発病枝率 0.6%（平年 0.7%、前年 0.5%）

発生ほ場率 35.7%（平年 22.9%、前年 21.4%）

発病果率 0.6%（平年 0.4%、前年 0.1%）

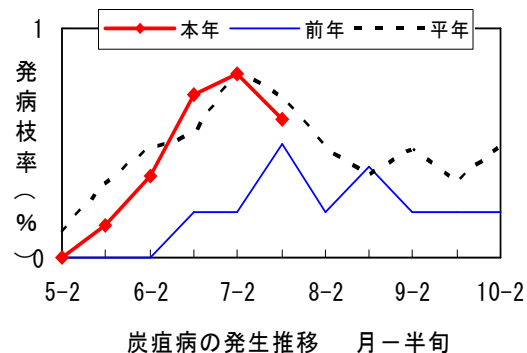
発生ほ場率 21.4%（平年 18.3%、前年 7.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は除去する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や、発病が多い園、本病に弱い品種(早秋)では、薬剤防除徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生果率 8.4% (平年 8.6%、前年 8.7%)

発生ほ場率 57.1% (平年 82.5%、前年 92.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

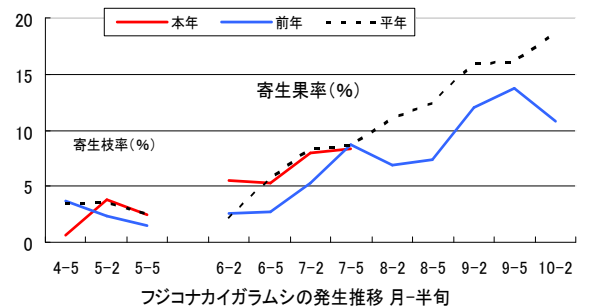
(3) 防除上の注意

ア 薬剤防除の効果が最も高いのは若齢幼虫期で

あるが、第2世代以降は齢期が乱れているので、園内をよく観察して適期防除を実施する。

イ 防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 合成ピレスロイド系剤は、天敵類に悪影響を及ぼすので、カメムシが飛来している場合を除き使用を控える。



3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

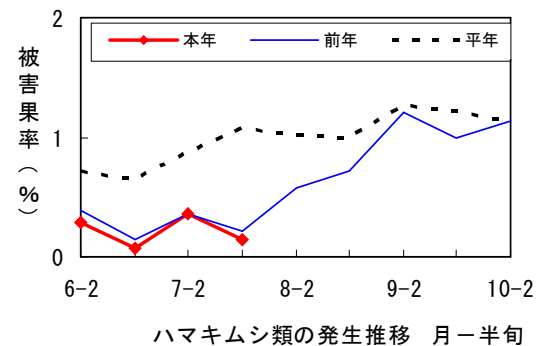
被害果率 0.6% (平年 1.0%、前年 0.1%)

発生ほ場率 28.6% (平年 43.7%、前年 7.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

防除の際は、ヘタの下や葉と重なった果実表面に、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



【果樹：共通】

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並 (平成20年より少)

<参考：チャバ初カメムシの発生状況>

本年 : 越冬量 0.7頭/m²、ヒノキ球果着生量 中

前年 : 越冬量 2.0頭/m²、ヒノキ球果着生量 やや少、後期発生型

平成20年(類似年) : 越冬量 0.5頭/m²、ヒノキ球果着生量 やや多、後期発生型

(2) 予報の根拠

ア ヒノキの球果量は中であった(±)。

イ 7月5半旬における県下25か所のヒノキ球果のピーティング調査の結果、主要3種類のカメムシ類の1地点当たりの寄生虫数は、前年・平成20年より少なかった(-)。

1地点当たり虫数 3.9頭<筑後支所管内 7.4頭> (前年 9.4頭<筑後支所管内 18.5頭>、平成20年 13.5頭)

ウ 7月1半旬～5半旬までの県下3か所の予察灯におけるチャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサガカメムシの合計誘殺数は、前年より少なく、平成20年よりやや少なかった(-)。

誘殺数 322頭 (前年 1,593頭、平成20年 758頭)

エ 7月5半旬調査の結果、被害果は少なかった(-)。

なしの被害果率 0% (平年 0.8%、平成20年 0%)

かきの被害果率 0% (平年 0.6%、平成20年 0.1%)

オ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 7月5半旬のヒノキ球果の口針鞘数調査結果から、新成虫がヒノキから離脱し果樹園へ多く飛来する時期は、県平均では9月3日頃と予想される。

イ 一部の常習発生地やスギ・ヒノキ林に近接する園地では、早い時期からの飛来が考えられるので、果樹園内の見回りを強化し、園内への飛来や果実の落果等の異常を認めたら、薬剤防除を行う。

ウ 樹種によって使用できる薬剤が異なるので、使用基準・使用回数等を遵守する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況) 半年比	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
		半年比	前年比	
ナシ ハダニ類	少	少	少	・多発生すると防除が困難になるので、発生が少ない時期の防除を徹底する。
カキ うどんこ病	並	並	やや多	・葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
カキノヘタムシガ	並	並	並	・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：やや少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－)。

発病葉数 0.2葉 (平年1.3葉、前年0.8葉)

発生ほ場率 22.2% (平年28.2%、前年35.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

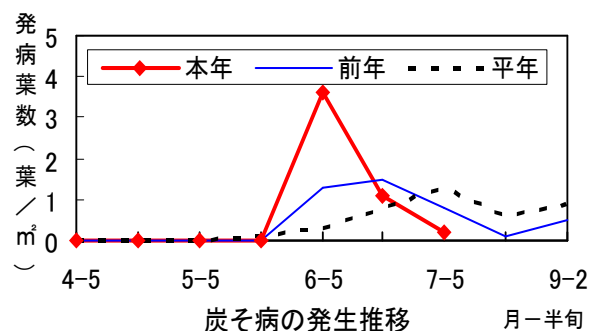
(3) 防除上の注意

ア 摘採・整枝後等の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

特に、最終摘採後の新芽(秋芽)に対する防除を徹底する。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

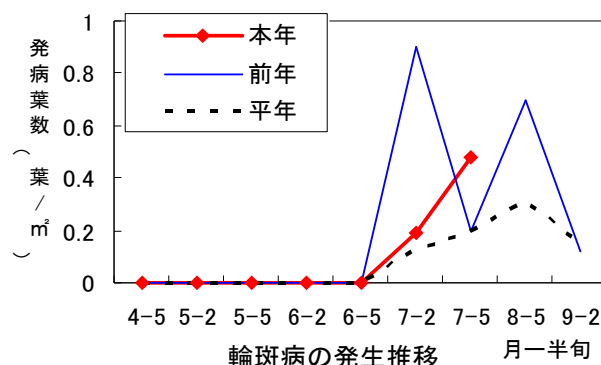
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病葉数 0.5葉 (平年0.2葉、前年0.2葉)

発生ほ場率 22.2% (平年9.6%、前年29.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。



(3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、三番茶摘採又は刈り落とし当日か翌日に防除を行う。

イ 台風等の強い風雨の後では、葉や茎の傷口の増加によって感染が急速に拡大する場合がありますので、降雨後速やかに防除を行う。

3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年より多

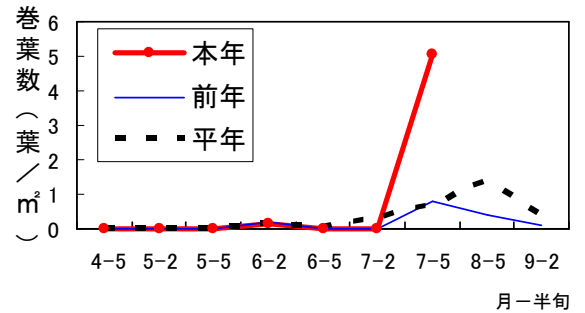
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった (+)。

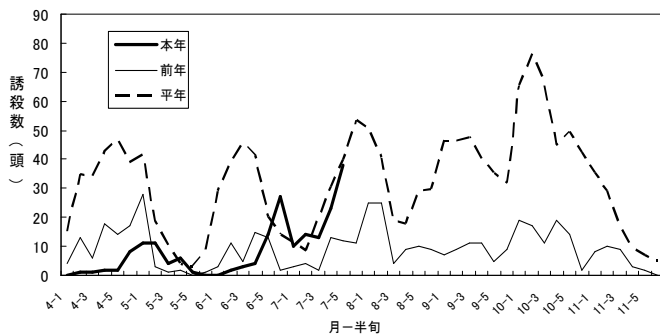
被害葉数 5.0 葉 (平年 0.7 葉、前年 0.8 葉)

発生ほ場率 77.8% (平年 28.8%、前年 41.2%)

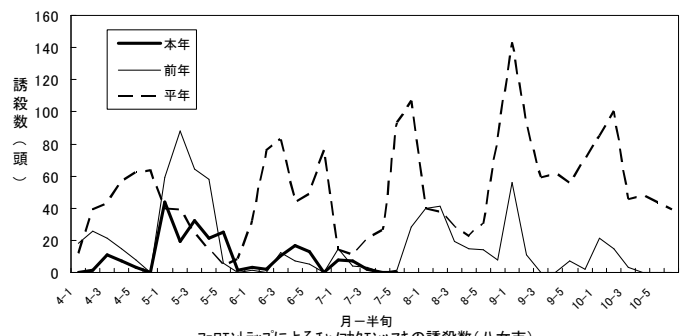
イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている (±)。



チャノコカクモンハマキの発生推移



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(筑後市)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、8月上旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった (-)。

被害葉数 0.1 葉 (平年 1.7 葉、前年 0.1 葉)

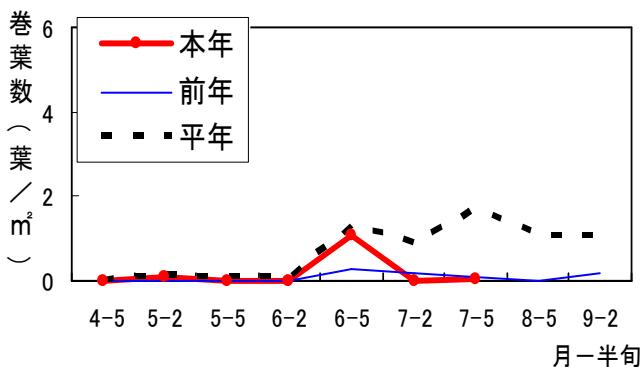
発生ほ場率 11.1% (平年 27.8%、前年 11.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている (±)。

(3) 防除上の注意

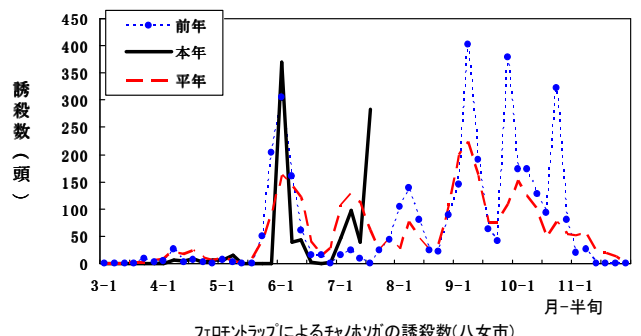
ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、8月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



チャノホソガの発生推移

10



フェロモントラップによるチャノホソガの誘殺数(八女市)

5 チャノミドリヒメコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

たたき落とし虫数 1.0頭（平年 0.7頭、前年 0.4頭）

発生ほ場率 33.3%（平年 50.2%、前年 47.1%）

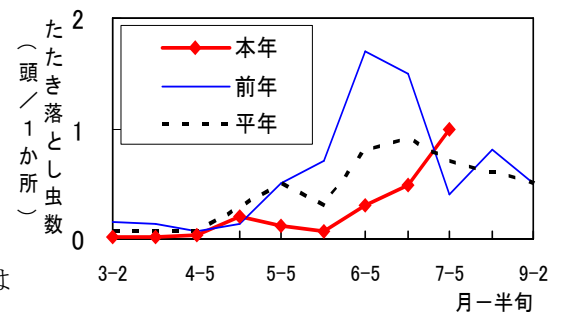
イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし（A4版上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



チャノミドリヒメコバイの発生推移

6 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

寄生葉率 0.2%（平年 0.5%、前年 0%）

50葉当たり虫数 0.1頭（平年 0.7頭、前年 0頭）

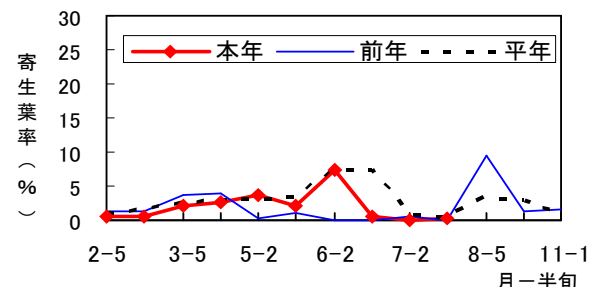
発生ほ場率 10.0%（平年 9.3%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



カンザワハダニの発生推移

7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

たたき落とし虫数 0.9頭（平年 5.1頭、前年 1.2頭）

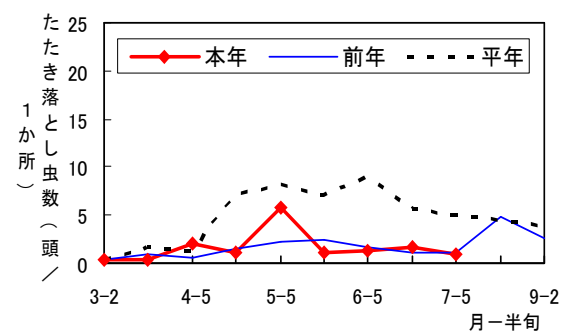
発生ほ場率 58.3%（平年 84.3%、前年 70.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア たたき落とし（A4版上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノキイロアザミウマの発生推移

【野菜：イチゴ】

1 うどんこ病（育苗期）

(1) 予報の内容

発生量：平年（過去7か年平均）・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量はやや少なかった（－）。

発病株率 0.5%（平年<過去7か年平均> 2.0%、前年 2.1%）

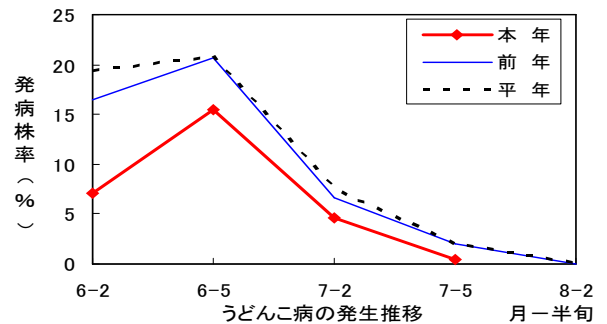
イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の間隔を空け通風を図る。

イ 伝染源である罹病葉や古葉は出来るだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 高温期は病斑が消滅するが、その後本ほで発病するので、定期的な予防散布を実施する。



2 炭疽病(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年（過去7か年平均）より多、前年並

(2) 予報の根拠

注意報第2号（7月28日付）を参照

3 ハダニ類(育苗期)

(1) 予報の内容

発生量：平年（過去7か年平均）・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生株率 10.4%

（平年<過去7か年平均> 9.3%、前年 9.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

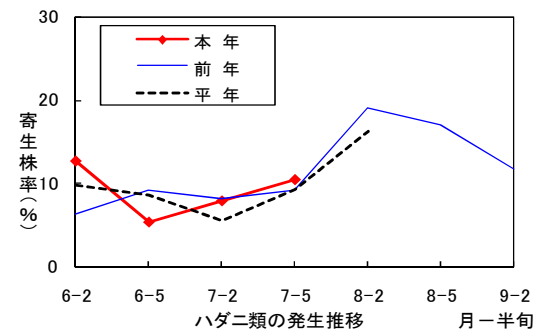
ア 多発後は防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ、密封し処分する。

ウ 夜冷短日や低温暗黒などの処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、本ほにハダニを持ち込まないようにする。

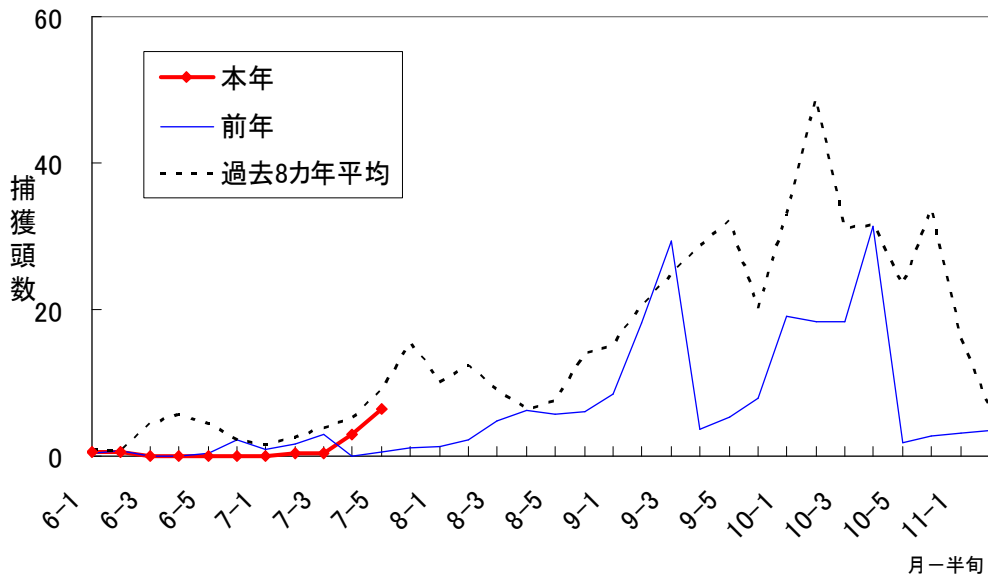
エ 本ほで天敵を利用する場合、育苗後半は天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。

オ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	並	やや多	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 多発生後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、防除を徹底する。 黄色蛍光灯を設置しているほ場では、日没1時間前～日の出後1時間点灯する。
アザミウマ類	並	並	並	
チョウ目 (ハモントウ・材カガコガ)	並	並	並	
野菜共通 コナジラミ類	並	並	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 野外に設置したトマト苗トラップ（筑後市）による捕獲数は平年並である。 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。



トマト苗トラップでのタバココナジラミ類捕獲頭数の推移 (筑後市)

福岡県病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>
 電子メール byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp

農薬の危害防止に努めましょう

～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月から8月を「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等について周知徹底するとともに、農薬による事故などを防止することを目的として、安全使用講習会の開催、啓発チラシの配布等関係機関、団体が一体となって取り組んでいます。

散布者の安全はもちろん、人畜、隣接作物、河川等への配慮についてご指導をお願いします。

なお、平成23年2月4日付農林水産省消費安全局長、環境省水・大気環境局長通知により、**農薬として「ツバキ油粕」等を使用することは禁止されております**ので、併せてご指導をお願いします。

農薬安全使用運動重点啓発事項

- ① 農薬ラベル確認の徹底
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)
- ② 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底
 - ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
 - ・飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
 - ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意
- ③ 水田除草剤や本田粒剤は、使用後7日間の止水を遵守
 - ・水田において農薬を使用するときは、止水期間を1週間程度とし、落水・かけ流しをしない。
- ④ 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄
- ⑤ 防除履歴の正確な記帳
 - ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳

